

二〇二三年二月一〇日

雨春や敵黒々と艶めきて  
夭折のちひさき墓に春の雪  
春泥に思はずたたら踏みにけり  
さざなみと見しは水面の青柳  
轍の指挟み置く帳簿かな  
熊笹が刎ね返しをるなごり雪  
○一三年二月九日

色づきし蓄默して寒戻り  
畦条里みせ雪残る千枚田  
梅東風に祈願の絵馬の十重二十重  
愛のチヨコあどけなき字の感謝状  
歳時記を開き居眠り春炬燵

赤銅の春月に胸さわぎけり  
春禽の一擲したる水面かな  
薄氷を踏まずにをれぬ登校子  
神木の手入れをすれば鳴の贊  
一〇二三年二月七日

寒もどり散歩をしぶる犬に喝  
完璧に筋とりきつてみかん食ぶ  
繰り出せる糸の限りや  
飛び石の靴跡しるき別れ霜  
ポストまで軒下づたひ春時雨  
花鋏取り落としたる余寒かな

ひ董素素せいか 豊はむ明みあはせい澄素ひ素たむ明日  
の雨秀秀いじ 実子ベ香おひる子じ子秀秀と子ベ香

二〇二三年二月六日

雲梯に反る吾子の髪風光る  
たんぽぽの絮まんまるの小宇宙  
老い母の寝顔はきっと春の夢  
側溝をたばしりをどる雪解水

出船はや沖の霞に消えにけり  
産土神に祈りて鍬を打ちはじむ  
梅東風をとらへ孤高の鳶となる  
園の木々芽吹くを告ぐる試歩の夫  
ふらここに隣りし友が恋敵  
漬物を手皿で受くる春炬燵  
一〇一三年二月四日

校門に最敬礼し卒業す  
老いの歯はまだ健在よ年の豆

毎日句会みのる選・一〇一三一年一月一二日

満みき天ひのとひのかとたか子べむかかしよえあひるこすもすはく子よう子